

語り部KOBEL1995

田村 勝太郎・崔 秀英・和氣 光代

阪神・淡路大震災から得た教訓

〈支え合うこと〉



## プロフィール

田村勝太郎さん：語り部KOB E1995前代表。体験を語り継ぐ。本気の防災を求めています。

崔秀英さん：語り部メンバー崔敏夫の三男。震災当時は高校二年生。須磨区の自宅は全壊全焼。大学生の兄を亡くす。震災後、兄と同じ大学に進学し、亡き兄の分まで自分が学び、強く生きると決断。父の意志を継ぎ、震災を風化させないため、語り部KOB E1995にメンバー入り。

和氣光代さん：一九九一年より神戸市立中学校で家庭科教員として三十三年間勤務。在職中は「住居領域」で震災の体験を交えて、災害に強い住まいについて考えさせる授業に力を入れてきた。二〇二三年三月末で退職。震災当時は東灘区のマンションで夫と二人で生活。同じく東灘区の実家が全壊で両親が亡くなる。震災後数カ月は灘区の夫の実家で避難生活をする。

○司会 皆さん、こんにちは。それでは、定刻となりましたので、ただいまより令和五年度講座「生きること」の第三回目を開催いたします。

それでは講演を始める前に、本日お話しいただきます、語り部K O B E 1 9 9 5の皆さんをご紹介いたします。講師の皆さんは壇上中央にお進みください。

語り部K O B E 1 9 9 5は、一九九五年（平成七年）一月十七日に発生した阪神・淡路大震災の震災体験を語り伝えるため、震災の十年後に立ち上げられ、現在まで活動を続けてこられています。

本日は語り部K O B E 1 9 9 5から御三方にお越しいただきました。舞台向かって右側から、崔秀英（チェ スヨン）さんです。

○崔 秀英 よろしくお願います。（拍手）

○司会 和氣光代（ワキ ミツヨ）さんです。

○和氣 光代 お願います。（拍手）

○司会 田村勝太郎（タムラ カツタロウ）さんです。

○田村 勝太郎 お願います。（拍手）

○司会 どうぞよろしくお願いたします。

本日の講座は、この後DVDをご覧いただいた後、崔さん、和氣さん、田村さんの順番でお話しいただき、その後質問などをお受けする時間をとりまして、四時頃の終了予定でございます。

では、お席にお戻りください。では、まずは語り部K O B E 1 9 9 5が作成されましたDVDをご覧いただきます。

(震災当時の映像視聴)

○司会 それでは、講演に移りたいと思います。最初にお話しただく崔秀英さんをご紹介いたします。崔秀英さんは震災当時、高校二年生で、須磨区の自宅は全壊全焼、大学二年生のお兄様を亡くされました。震災後、お兄様と同じ大学に進学し、亡き兄の分まで自分が学び、強く生きる決断されました。語り部メンバーとして長く在籍されているお父様の意志を継ぎ、震災を風化させないために、今年、語り部K O B E 1 9 9 5に入られました。

それでは崔秀英さんにご講演いただきたいと思います。皆さん大きな拍手をお願いいたします。  
(拍手)

○崔 秀英 皆さん、こんにちは。本日は、語り部K O B E 1 9 9 5のメンバー内三名で、この枚方市に來させていただきました。三名とも話の共通点はもちろんながら、違う角度で話がなされると思いますので、改めてよろしくお願いいたします。

早速ですが、今日私が皆さんにお話ししたいこと、伝えたいことは、大きくは阪神・淡路大震災発生の当日の話から始まり、震災を経験した前後でどのように自分自身の考え方が変わり、これからの人生をどのように生きていこうか、生きていくべきなのについて話をしていきたいと思います。

初めにお伝えしておきますが、私の話はあくまでも私が経験して思い、感じたことです。ですので皆さんに、私の気持ちを強要したり、理解や同意を求めたりするものではないということだけ先にお伝えしておきます。また、こうやって皆さんの前でお話することにすごく緊張しております。今日も、枚方に十二時前に着く予定が、朝五時に起きてしまいました、改めてよろしくお願ひします。つたないので分かりづらいこともあるかと思いますが、よろしくお願ひいたします。

まず自己紹介からさせていただきます。私の名前は崔秀英と申します。在日朝鮮人三世です。秀英という名前は朝鮮、韓国では女性の方がよく付ける名前ですが、私は男性です。私には、両親と四つ上の兄、三つ上の兄がおり、年子の兄二人と私の三人兄弟の末っ子です。幼稚園から大学まで朝鮮学校に通いました。ですので朝鮮語、韓国語、日本語がしゃべれるバイリンガルです。年齢は四十五歳です。現在、大学一回生と高校一年生と小学六年生になる三人の息子がいます。私は子どものときから本当に勉強が苦手で、成績もクラスで下から数えたほうが早かったぐらいです。でも、部活でバスケットボールをやっている、運動は大好きでした。勉強が本当に嫌いでできなかったんですが、反対に、兄は二人とも成績優秀で、大学にも進学しました。一方で私は当時、大学へ進学する気もなく、高校を卒業したら働いて実家にお金を入れて、平凡に生活しようと考えていました。

自己紹介はこれぐらいにして、皆さん、先ほどの映像にあったように、阪神・淡路大震災は、

一九九五年一月十七日、五時四十六分に発生し、震度七、マグニチュード七・三、亡くなられた方は六四三四名、行方不明者三名という地震でした。発生当時は、日本国内で、関東大震災に次ぐ大きな地震だったのですが、二〇一一年三月十一日に東日本大震災が発生して、この地震も阪神大震災と同じ震度七だったものの、マグニチュードは九・〇、死者一万五四七名、行方不明者七四八二名と、阪神・淡路大震災よりさらに大きな地震になりました。亡くなられた方や行方不明者など犠牲者が多い理由は津波です。こういったことを皆さん、知識として分かっていただけかと思います。では、阪神・淡路大震災の当日の話からしたいと思います。

当時、私は十七歳の高校二年生でした。もう二十八年前になります。二十八年前のことですが、今でも当時の記憶は鮮明にあります。被災当時の自宅は神戸市須磨区千歳町にありました。自宅は長田区と須磨区のちょうど境目のところにあつて、近くにJR新長田駅があつたのですけれども、そこから徒歩五分ぐらいのところにある木造二階建ての六軒長屋に住んでいました。長屋は皆さん、分かると思うんですけども、壁一枚で仕切られた並んだ家のことを長屋といいます。大阪にも長屋はあると思うんですけども、長田は特にそういう家屋が多かつた地域でした。地震発生ときは、もちろん僕は寝ていました。私と両親が二階に寝ていまして、次男の兄が一階に寝ていました。寝ていたら突然ドーンと、すごい音がしたんです。それで目が覚めたんですけども、そのときはミサイルでも落ちたのかなというイメージでした。それぐらい大きな音がして数秒静寂があつた後に揺れ始めたんです。そしてあつという間に大きく激しい揺れが始まつて、イ

メージとしては、その揺れは、家を丸ごとシェーカーに入れて揺さぶられたような感じでした。今まで経験したことがない揺れで、何が起きているのか分からないまま布団を被って叫んだことをすっかり覚えています。揺れが収まってからもあまりの恐怖とどうしたらいいのか分からないのとで、すぐには動けず、布団を被ったままでした。でも、このままでは駄目だと思って気合を入れ、声を出しながら布団を持ち上げました。そのとき、最初に目に飛び込むものは何も無く、真っ暗でした。辺りは何も見えない、本当に真っ暗。普通に生活している中では、幾ら電気を消しても街灯など、小さな光はあるじゃないですか。それが全くなかったのです。本当に真っ暗なのは初めての経験で、どうしていいか分からない状況で、手探りしても何も見えないです。何が起こったかも分からなかったです。そこで隣の部屋で寝ている両親に声をかけました。隣の部屋と言ってもスライドする扉で隔てた部屋だったんですけれども、その部屋にいる両親に、「父」のことを朝鮮語で「アボジ」というのですが、日頃父を呼ぶときと同じように、「アボジ」と声をかけました。隣から声が返ってきたので、無事だなと思って、隣の部屋に行くうと思っただけでも、見えないので恐る恐る、はいつくばりながら隣の部屋に行きました。そうしているうちに少しずつ目が慣れてきて、薄暗く部屋の状況が見えてきました。部屋の状況が分かったそのとき、とんでもないことが起こったと思いました。家が明らかに傾いていましたし、家の中には物が散乱している状況でした。両親の部屋に行き、「とにかく外に出よう」とアボジと話をしている最中に、一階で寝ている兄のことを思い出したんですね。兄のことを朝鮮語

でヒョンニンと言うんですけれども、「アボジ、ヒョンニンが下で寝ているからどうにかしないとあかん」と言いました。アボジから僕が「一階に行つて来い」と言われて、少し恐怖を感じながら一階に行こうとしたんですけれども、二階から一階に行くときにあるはずの階段がなかったんです。どういふことか分からず、アボジに「階段がない、階段がないから下に行けない」と言いました。アボジは「何を言うてるんや、そんなことないやろう」と言っていました。こちらに来て階段がない光景を見たときには絶句していました。何が起こっているか分からない。階段がないし、どうしたらいいか分からない。そんな中でベランダをぶち破つて、とりあえず外に出ようかという話になったんですけれども、ベランダを開けようにも、家が傾いていて窓が開かないんです。それでベランダに続く窓を壊したんですけれど、そのときに初めて外に出て、その頃には外はもうすでに少し明るかったのですが、私が外の光景を見たときには、町全部が崩壊してしまして、さつき映像に出ていたようなあのままでした。僕は初めての体験だったんですけれども、先ほどミサイルが落ちたと言いましたが、空爆されたような、あの感じを当時、目の当たりにしました。そんな中、兄を助けないうという話になったので、母親も父の隣で寝ていたので無事だったんですけれども、兄を助けようと部屋に戻っていました。母が床づたいに兄に「ヒョンニン、生きてるか」と声をかけました。微かに声だったので生きていると思えました。兄を助けるには床を壊さないと駄目だったんですが、その術がないのでどうしていいか考えている間に親戚だったり父の友人だったり家が家に駆けつけてくれて、皆に状況を説明して、皆が道具を持ち



寄って床を掘ったんです。掘り始めてからどれぐらい経ったのか、今何時なのかも分からず、町の状況が壊れていることしか分からなくて、それでもひたすら父と床を掘る作業を続けました。何時間だったか分からないですけれども、ようやく頭が見えたんです。「よかった、助かったな」と思ったんですが、僕が異変に気づいたんです。その人の頭は髪の毛が薄くて、そんなことあるか、地震で髪の毛が薄くなるわけがないやろうと思いました。僕はアボジに、「アボジ、髪の毛が薄いからおかしい」と言いました。アボジは必死だったので、「ええからもう黙れ、もう出さないとあかん」と言いましたが、それでも僕が「いや絶対これは違う」と何度も促して、アボジもやっと気づいて、「おまえ、誰や」と言いました。その人は誰だったかというとうちの家の隣のおじさんでした。これは何が起こったのかと言うと、六軒長屋のうち、僕の家だけが二階建てだったので、地震があまりにも激しくて、家の二階が右の家の一階に乗ってしまったのです。僕らには家がずれていたことが分からなくて、ずれたままその床を掘っていたので隣の人が助けだされたということです。それで「もう一度探さないとあかん」となりまして、もう一度表に出て、アボジとどこら辺に寝ていたかを予測して、家も潰れているのでなかなか予測がつかないんですけれども、なんとか予測を立てながら必死にがれきを掘って、何とか兄の姿は見えました。でも、兄の姿を見た瞬間にアボジが号泣してしまつて、それを見て僕も号泣してしまいました。見た瞬間に「これはあかんな」と思いました。その光景は今も覚えています。兄の上には水屋や家の階段が全部乗っていました。それで周りの人たちが車を上げるジャッキを持ってき

てくれて、なんとか隙間を空けて兄をがれきの下から出したんですけれども、その頃にはもう兄は亡くなっていました。多分兄は自分が亡くなったことすら分かっていないと思います。一瞬の出来事で、今でも自分がそうなっているということを分かってないんじゃないかなと思います。

少し亡くなった兄の話をしようと思います。当時、兄は二十歳でした。兄は東京にある朝鮮大学校に入学し、寮生活を送っていました。兄が二人いると言いましたが、長男も次男も朝鮮大学校に入学して、本来なら大学の寮で過ごしている時期だったんですけれども、二十歳の兄は成人式に参加するために神戸へ帰ってきていたんです。成人式が一月十五日で、その次の日十六日に東京に帰る予定だったんですけれども、兄は少し体調を崩してしまって、それで父が一日延期して十七日に戻るように引き留めたんです。まさか次の日に震災が起るなんて誰も思いもしませんでした。だからアボジは、今でも自分が引き留めたせいで兄が亡くなってしまったと一生消えない心の傷を負い、母もまた同じ気持ちで、震災以降はずっとつらい日々を過ごしています。亡くなった兄は、すごく不器用な兄でした。でもすごく男気があって、けんかがすごく強かったんです。学年では毎年、毎回成績優秀で生徒会副会長もやっていました。それなのに悪いこともしていました。中学のときからたばこも吸っていましたし、学校帰りには日本の学校の学生とよくけんかをして帰ってきていました。昔は朝鮮学校と日本学校はすごく仲が悪くて、よく僕もけんかをしましたし、そういう時代でした。私は小さいときから兄にいつも助けてもらっていて、守られていました。朝鮮学校は基本、幼稚園から中学校まで地域に一校しかないのです、同じ学校に

兄と一緒に通っていました。僕には学校に行っても兄たちがいたので、僕より年上の人たちも僕に手を出せなかった。私はいつも兄に守られていました。本当にかっこいい兄でした。

結果的に自宅は全壊全焼、震災当日から家もなくなってしまうところもない。周りは火の海でした。地域全ての建物が潰れて燃え、消防隊は水が出ないホースを持ちながら立ち尽くしています。逃げ遅れてまだ生きている方が助けを求めていたんですけど、火の回りも早く、水も出ないので、助けることができず、そのまま亡くなる方をこの目で見ました。挟まって逃げられなくて、助けてくれと言ってるんですけど、誰も助けられず、そのまま燃えてしまっただけで亡くなってしまう方を見るという経験もしました。震災のときは、本当につらかったです。何よりもやっぱり兄が亡くなったことが一番つらかったですし、「これからどうやって生きていけばいいのか」と、毎日泣きながら過ごしました。震災当日に過ごした場所は、病院の仮設の遺体安置所でした。そこは、プレハブだったんですけど、次から次へと遺体が運ばれてきて、スペースがなくなってきたので、身元が分かっている人は他に移動してくれと言われました。でも移動するところがないので、病院以外に移動するところがないからどうしたらいいねんという状態でした。次から次へと病院には患者や遺体が運ばれてきて、病院内は既にパニック状態でした。そんな中で病院側から、山陽電車の高速長田に村野工業高校という男子校があるんですけど、そのの体育館へ行くように言われたんです。その体育館の中に何があるかというと全て遺体でした。行つたときには遺体がものすごい数あったんですけども、とりあえずその体育館で過ごしまし

た。今でもそのときの光景がすごく記憶に残っています。体育館の中は、全部遺体で、身元が分らない遺体は毛布にくるまれて放置されていました。さらに真っ暗で食べる物も飲み物もなかったです。館内全てが遺体だったんですが、感覚が麻痺してしまっていましたし、精神的に追いやられて、トイレも水が出ないので、汚い話、便器には大が山盛りになっている状況でした。

そんな中、自衛隊が村野工業高校にキャンプを張って救助に来ていたんです。その体育館内にずっといると気が狂いそうだったので、その自衛隊の配給に並びました。すごい長蛇の列で、僕は五時間並んだんですけれど、もらえたのは乾パン一缶だけだったんです。もう絶望しかなくて、そのときもすごく泣いた記憶があります。そんな中でも自宅を確認しに行くために町に出たんですけれども、状況はもう最悪でコンビニの自動ドアを潰して食料を盗んでいる人がいたり、長田はケミカルシューズの町なので、靴工場がたくさんあるのですが、素足で逃げた人が壊れた靴工場に入って靴を盗んだりしていました。とにかく無法地帯で、町の機能は低下している状況でした。

遺体だらけの村野工業高校に三日間いたでしょうが、三日間の中で、在日同胞の方が私たちの家族をずっと探していたみたいで、村野工業高校にしていることをどうにかキャッチして、高校に来てくれたんです。それで今すぐ、僕の母校の西神戸朝鮮初中級学校に移るよに言われました。それでやっと避難場所を移すことができ、当時は、朝鮮学校に行けばいいという発想が私や両親にもなくて、そんな発想に至る余裕もなかったですし、何も考えられない状況でした。兄の遺体から離れることはもちろんできないですし、どうしたらいいか分からない状況だったの

で、思考も機能低下していたのだと思います。そのとき探してくれたことがすごくありがたかったことを今も覚えています。そうして移った避難場所が西神戸朝鮮学校だったんですけれども、そこは私や兄たち、私の息子たちも卒業して、現在私の三男がその学校に通っています。村野工業高校から西神戸朝鮮学校に着いたとき、同級生の家族や知り合いの方々がたくさん避難していませんでした。着くなり僕に温かいスープをくれたんですけれども、まともに食べていなかったので、寒い中、遺体だらけの体育館から自分の母校に来たこと、知っている方に出会えたことの安心感もあり、泣きながらその温かいスープを飲んだことを覚えています。そういつた経験しながら、やっと避難生活を送れるまともな場所というか、決してまともな場所ではないのですけれども、遺体だらけのところから母校に来られた流れでした。それでもやっぱり避難生活は決して楽ではなかったです。日を追うごとに全国の在日同胞や組織、全国にある朝鮮学校から毎日のように救援物資が届きましたし、みんなトラックや原付などで荷物を積んで何日もかけて運んでくれました。時間を問わず、夜中でも届けてくれましたし、道中もまだまだかなり危険で、信号機もついていないですし、余震もまだまだたくさんある中で、決断して物資を届けてくれた行動力には本当に助けられましたし、感謝しかありませんでした。そんな中、やっぱり心ない人間が世の中にはいるので、物資が不足していることを逆手に、町で物資を高値で売っている人もいましたし、物資目当ての盗みも多発していましたし、さらに西神戸朝鮮学校の近くに六軒商店街という商店街があるんですけど、その商店街の中で女性が乱暴された事件もありました。そのようないろんな

状況を踏まえて、僕らは、防犯のために避難先の西神戸朝鮮学校の運動場でドラム缶に火をたいて、避難者たちが交替制で警備を行いました。西神戸朝鮮学校の本当に目の前に真野小学校という日本の小学校があります。真野小学校もたくさんの方が避難していたのですが、物資が全然なかったのです。僕らもそれを聞いて、届いた物資を真野小学校と一緒に分けて、朝昼晩、真野小学校で避難している日本の方々を朝鮮学校に来て、毎日一緒にご飯も食べました。当時、朝鮮学校と日本学校の交流はあまりなかったですし、立ち入ることすらなかったですけれども、でもやっぱりそういうときに、国籍は関係ないです。困っているときは助け合いがやっぱり必要です。そういう助け合いの姿や全国から物資を運んでくれる在日朝鮮の同胞の方々の姿を見て、私の考えが変わりましたし、これからどう生きていくべきか考えさせられました。震災で失ったものが大きすぎたことで、震災が人生のターニングポイントになり、避難生活が自分の考え方を変えたんです。僕の人生のターニングポイント、一、として、助け合いの精神をここで感じました。避難生活をしながらも学校が再開しました。僕は当時高校生だったので、学校再開のお知らせが来ました、二月中旬ぐらいだったと思います。私に通っていた高校は、JR垂水駅から北に上がった神戸朝鮮高級学校というところでした。学校は再開しましたが、やっぱり最初は学校に行く気力もなかったです。でも、気持ちを切り替えて登校しました。学校に着くと、みんな私に対して気まずそうな感じだったんです。その高校の中で、身内が亡くなったのは私だけでした。家が半壊という人はいたのですが、僕だけが親族を亡くした状況だったので、誰も僕に話しかけられな

い雰囲気ですごく感じました。でも、そんな中震災の話には触れずに、一人の同級生が話しかけてくれて、僕はそのことがすごくうれしくて、すごく勇気をもらったんです。もう一つ、今までしゃべったことのない同級生の女性の方が手紙をくれたんです。今までしゃべったことがなかったのに、黙って手紙をくれて「つらい気持ち、全ては分からないけど頑張ってください」という手紙をもらって、僕は本当に勇気をもらって、そういう話しかけてくれる行動力だったり、手紙で何か伝えるという気持ちだったり、そういうことをすごく感じました。そこで人生のターニングポイント、二、として、人に対する思いや接し方に気づかされました。学校再開は二月だったので、すぐに、四月から高校三年生になりました。避難所とはいつでも学校が再開すると出ていかないと駄目なので、仮設住宅に移動しました。そこからは仮設住宅を転々としながら学校に通いました。実家がもともとあった場所に今、両親が家を建てて住んでいるんですけど、その家を建てるまで仮設住宅を七回、転々としたでしょうか。年に一回ぐらいは引越していった状況でした。高校三年生になると、やはり進路の話になってきます。最初に言ったんですけれども、私は当時成績が悪かったんです。でも高校三年生のときはなぜか学級委員長をさせられたり、一年生、二年生のときもクラスのナンバーツターのポジションだったり、結構責任のあるポジションに立たされるが多かったんです。私の進路について、両親、当時の担任の先生や地域の大人たち、先輩、兄の同級生たちなどが、相談というか、話をよくしてくれました。簡単に言うと大学に進学して、亡くなった兄の分まで勉強をせなあかんという話でした。兄がで

きなかつた分を弟がしっかり引き継ぎなさいとよく言われました。最初に話したように私は勉強が本当に嫌いで、働く気でいましたが、そんな中でも私にいろんな声をかけてくれて実はありがたかったです。逆に、プレッシャーにもなりました。進路については、悩みに悩みましたが、大行きを決意しました。進学先は兄たちが進学した朝鮮大学校です。朝鮮大学校は一枚、東京にしかないのです、今もっと減っていますけど、当時全国に十二校あつた朝鮮学校の卒業生たちがその東京にある朝鮮大学校に集まるんですね。そこは皆、全寮制で、兄たちも行っていました、僕もそこに入学することになりました。その兄たちが進学した朝鮮大学校に行つて、兄の分まで勉強して、震災のときに助けてくれた全国の在日同胞の方々、もちろん、日本の国の方々もそうですよ。少しでも恩返ししたいという気持ちが強かつたので、震災前の考えとは違って、大学に進学することになった、これが人生のターニングポイント、三、大学進学です。私は政治経済学部に進学して、目標どおり恩返しするために卒業後は団体職員になり、いろんな全国の在日同胞に会いながら震災当時の感謝を伝えましたし、兵庫県を拠点に在日朝鮮人のコミュニティや朝鮮学校を守るために三年間活動しました。今は違う仕事をしながらボランティアで、避難していた僕の母校、今は西神戸朝鮮初級学校になっているんですけども、その学校運営の役員をしていますし、神戸の三宮から近い隣の灘駅前に神戸朝鮮初中級学校があるんですけども、その教育会の理事をやっております。

ここまで震災から大学進学までのお話をしたんですけれども、結論的に震災を経験して私の



何が変わったのか、これは私の人生観が変わりました。「人生観」と辞書で調べたんですね。人生に関するものの考え方を意味するとありました。人生とはこういうものだ、こうあるべきだといった事柄を指すことが多いようです。また生き様や生き方と書いてありました。先ほどお話しした、人生においての僕の大きなターニングポイントは震災です。震災経験から避難生活を経て、助け合いの精神、人に対する思いや接し方、まさかの大学に進学するということ、三つのターニングポイントがありました。その中でもやはり震災で一番感じたことは、「人の命とは」です。まさか兄が亡くなると思わなかったですし、まさか大きな地震が兵庫県で発生すると思わなかった。兄を亡くして思いました。人間はいつ死ぬか分からないなど。人間の寿命は決まっているんだなど。いつ何が起るか分からない。それを十七歳のときに感じました。だから後悔のないようにこれから生きようと、明日死ぬかもしれない、明日身近な人や大切な人が亡くなるかもしれない。人間は後悔をたくさんしますよね。その後悔を経て成長をしていくんですけども、「あのときやっておけばよかった」、「あのとき声をかけておけばよかった」、「あのとき連絡しておけばよかった」、そういった後悔をするんだったら行動して後悔しましょう。やってから後悔しましょうとお伝えしたいです。時間は戻ってこないです。命も戻ってきません。後悔ないよう生きるのとはなかなか難しいし、勇気は必要です。でも意識を持つことで五つの後悔が四つの後悔に減るかもしれないですし、行動に移した結果、成功するか失敗するかは分からないですけれども、チャレンジは必要だと思います。今ある当たり前の環境に対して、周りで支えてくれる方

が必ずあります。私はアボジとオモニに、父と母に感謝しかありません。震災で自分の息子を亡くして、財産も全て失って、それでもはい上がって日常生活を取り戻し、私や長男を育てて、大学まで進学、卒業させてくれました。私の人生は本当に変わりました。震災で失ったものは計り知れませんが、その後の私の人生観が変わり、まさか今日、皆さんの前でこうやってお話しする日が来るなんて思いもしませんでした。現在も父は震災を風化させないために語り部KOBEE1995で震災経験をいろんな方に伝える活動をしております。私のできること、やるべきことは、父と同じように震災について語り継ぐことです。当時助けてくれた方々への感謝の気持ちを忘れずに、自分の経験談が誰かのためになり、勇気になればと思います。皆さんの人生はこれからです。私もまだまだこれからです。皆さん、職場での人間関係、先への不安とか、いろんな悩みがたくさんあると思います。皆さんの人生観、それぞれあると思いますし、幾つかのターニングポイントが今まであったと思います。これからもあるかもしれせん。それで人生観が変わる可能性もありますし、変わらない可能性もあります。自分の人生観をそれでもしっかり持つてもらって、コロナの影響もあり人とのつながりが薄れていますが、改めてつながりを大事にして後悔のないようにしましょう。

最後に、私の長男がこの四月から朝鮮大学校に進学しました。これで亡くなった兄の分まで、私、私の息子が同じ大学に通うことになりました。亡くなった兄の分は、今は私の息子がそれを引き継いでおります。私の震災経験からの人生観については以上となります。ありがとうございます

ました。(拍手)

○司会 崔秀英さん、ありがとうございます。

○崔 秀英 ありがとうございます。

○司会 崔秀英さんは今回の講演が三回目ということで、今後のために感想をお聞きしたいとお伺いしています。どなたか。いかがですか。

○質問者A 大変貴重なお話、どうもありがとうございます。今年は関東大震災百年というところで地震に関するいろいろな、映画も何本か見ているんですけど、一つだけお伺いしてもいいですか。朝鮮学校に避難されていたとき、その朝鮮学校には日本人の人は誰一人いらっしやらなかったんですか。全く日本と朝鮮学校が分かれていて、物資のやり取り、支え合いがあったのは分かるんですけれども。

○崔 秀英 はい。

○質問者A 一緒に寝起きされていた、避難されていたことは全くなかったんでしょうか。

○崔 秀英 そうですね、僕は当時高校生だったので、大人の方は皆さんどんな方か知らない人もいました。知っている人もいますし、知らない方もいました。だから、その方が日本の方なのか朝鮮の方なのかは僕の認識がただけだと思います。まだ子どもだったので、避難されていた日本の方もいたと思います。でも、やはり先ほども言ったように、多分普通にこれはそういう時代だったと思うんですけれども、日本の学校が目の前であって、朝鮮学校に避難しようと思いま

すか。御質問いただいた、ご本人さんはどうでしょう、朝鮮学校と日本の学校があつて、どちらへ行きますか。

○質問者A　ちよつと微妙ですね。

○崔　秀英　ですよ。

○質問者A　というのは私も在日三世なので、日本で生まれて日本の学校に行き、大学は韓国の大学に行ったんですけれども、その場になつてみないと想像ができない。

○崔　秀英　そうですね。当時だから分けたわけではないです。もちろんそうです。だからこそウエルカムだったので、食事と一緒にしましたし、物資も分けました。もちろん分けていなかったら駄目です。当時の時代背景は今みたいにそんなグローバルではまだなかったですし、考え方も当時と今は全然違いますよね。でも今の時代でも躊躇するところは、人それぞれあると思いますけども、避難された日本の方もいたのはいちと思えます。ただ僕の認識不足だと思えます。確実にいたか、いなかったのかは分かりません。でも確実に言えるのは、食事を毎回一緒にしましたし、もちろんウエルカムな雰囲気ではなかったです。もちろん、こちらが「来るな」とかそういったことは言っていないです。むしろ一緒に避難しようとして、情報共有をしましょうという状況でした。

○質問者A　お話の中で、当時はとても日本は朝鮮半島側と仲が悪かつたということなので、その辺りがちよつと気になりました。

○崔 秀英 朝鮮半島というか、学生時代は、僕らは、何も知らない子どもだったのでよく日本の学校とけんかしたという話です。おっしゃりたいことはすぐ分かるんですけども、朝鮮半島と日本政府の話をするときりがないので、そういう情勢に関してのことを言っているのではないということは分かっていたと思います。

○女性 分かりました。

○田村 勝太郎 一ついいですか。

○司会 はい。

○田村 勝太郎 私は後でしゃべるんですけども、彼の父親と小学校以外一緒に、震災があった息子さんを亡くしてからまた一緒に過ごすようになって、今は語り部活動が続いているというややこしい間柄で、今の話の中で一つだけ事実として、彼が住んでいた町のすぐ近くに、僕も通った、今は公園になっていているんですけども、千歳小学校というのがすぐ隣にありました。周りが火災になってしまったために千歳小学校という建物自体はあったんですけども、避難所としては駄目だということで、もしそこが避難所になっていたら家から一番近いし、避難する選択はあったかと思うんですけども、ほかのところ、もっと東のほうに住んでいた人は、避難所が近くになればいけないわけだし、私が後で話をするとき、朝鮮のおじいちゃんが出てくるのですが、その方は神戸の小学校と一緒に避難していたということになります。やっぱり近くにあった学校自体が避難所にならなかったということも加えて考えてください。

○司会 ありがとうございます。皆さん、崔秀英さんに大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

○崔 秀英 ありがとうございます。

（休憩）

○司会 では、講演を再開させていただきます。

次にお話しただく和氣光代さんをご紹介します。和氣光代さんは震災当時、東灘区のマンションにご夫婦で生活されており、被災されました。ご実家が全壊で、ご両親を亡くされています。今年三月まで神戸市立中学校で家庭科教員として勤務され、震災の体験を交えて災害に強い住まいについて考えさせる授業に力を入れてこられました。和氣さんも今年、語り部KOBÉ 1995に入られました。

それでは和氣光代さんにご講演いただきたいと思えます。皆さん、大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

○和氣 光代 語り部会の和氣光代と申します、よろしくお願いいたします。先ほども紹介いただいたんですけども、私からも少し自己紹介をさせていただきます。私は今年の三月末まで神戸市立の公立中学校の教員をしていました。そして、七月よりこの語り部会に参加させていたいています。語り部会の活動に参加するきっかけは、八年ほど前に中学校で、私の家庭科の授業の住居領域や総合学習や防災学習で自身の震災の体験を伝えることが新聞に掲載されて、

その際にこの語り部会の前の代表、今日も来ています田村さんからお誘いいただいたのがきっかけです。そのときは自分の仕事もとても忙しくて、仕事と自分の生活で本当に時間的にも気持ち的にも余裕がなくお断りさせていただいて、退職したらぜひやらせていただきたいとお返事をさせていただいていました。このたび、退職したことを機に参加させていただきました。本当に学校現場でも、震災のことを体験していたり知っていたりする教員が少なく、「風化させたらあかん」、「経験を伝えていかないといけない」と年々思っていました。

では、お話をさせていただきます。先ほどもありましたが、皆さんもご存じのとおり、阪神・淡路大震災では、六四三四人の方が亡くなっています。その八十%の人が圧死と言われております。私の両親もこのうちの二人になります。神戸市のホームページですが、被害としましては、全壊六万七千棟余り、半壊が五万五千棟余りということのでかなりの建物が全壊・半壊をしました。私が当時住んでいた神戸市東部にある東灘区や灘区辺りで特に被害が甚大であったのは、東西に走る六甲山側、六甲山の山側の阪急電車が通っていて、そして海側といえますか、浜のほうに阪神電車があるんですけども、その間の带状の地域がとてもひどかったんですね。震災当時、私は夫と二人、神戸市東灘区の住吉というところのマンションに住んでいました。震災の一年半ぐらい前に結婚して、仕事もしていたので実家の近くが何かと便利だろうということ、車で行ったらスープの冷めない距離に住んでいました。私の両親も東灘区の、私が住んでいた住吉の隣の魚崎にいました。実家は木造の長屋と言われるもので、築年数ははっきりしないうすけれ

ども、かなり古いものだったと思います。昭和五十六年に建築基準法が改正されたということですが、もちろんそれ以前のもので、今もし現存していれば必ず耐震補強をしなければならない建物だったと思います。先ほどもお話ししましたけれども、東灘区と灘区は、本当に阪神と阪急の間のところが、建物が倒壊、全壊したところがとても多かったですけれども、阪急電車よりも北側といいますか、阪急電車と六甲山の間のところは、本当にあんまり揺れなかったんですね。現に、夫の実家は車だったら二十分もかからない灘区の摩耶山のふもとにあるのですが、そこはたんす一つも倒れなかったんです。さらに、たんすの上に置いてあった置物も落ちなかったというぐらいに揺れの違いがありました。

次の写真は、震災当日の実家の近くの写真ですけれども、後に雑誌に掲載されていたものを見て使って使わせていただいています。これは本当に実家の近くの写真となります。今からは一九九五年一月十七日の私の体験をお話しさせていただきます。五時四十六分ですが、その頃も中学校に勤務していましたので、お弁当を作るために起きていて顔も洗ったりして、お弁当を作るためにガスコンロに火をつけようとして手を伸ばした瞬間だったんですね。そのとき本当に揺れた瞬間は体が上下に動いて、その伸ばしていた腕も上下に動いたというのがすごく鮮明に記憶に残っています。突き上げるような揺れとよく言われるんですけれども、そういった最初の上下の揺れがありました。何が起こったか分からなかったんですけれども、私は一人でキッチンにいて、夫がまだ寝室で寝ていましたので、キッチンから寝室まで、洗面所があったりお風呂があったりし



て、二メートルぐらいしかないような廊下、本当に一番揺れのひどいときだったと思うんですが、その二メートルを歩こうとしてもまっすぐ歩けないんです。壁にぶつかったりしながら、寝室のドアが、九十センチぐらいの横幅のドアだったと思うんですが、ドアは開いているんですが枠に入れないんです。枠に入れないで思いっきり頭を木枠にぶつけてしまって、そのときに額をばかっと切ってしまったて血が流れていた状態だったんですが、それぐらい揺れの激しいときに二メートルぐらい歩いていきました。本当に何が起こったのか分かりませんでした。さつきも秀英さんがお話しされていましたが、爆弾が落とされたんじゃないかというふうに思っていました。当時、私たちはなぜか神戸は地震のないところと信じていたんですね。住んでいたマンションは三階建てで、ワンフロア三戸で九戸しかないような小ぢんまりとしたマンションで、築年数も浅かったのか幸いにもマンションの外壁が少し損傷したぐらいで、建物は倒壊しませんでした。ですが、家の中は本当にぐちゃぐちゃです。当時のブラウン管テレビがテレビ台から二メートルほど飛んでいましたし、もちろん冷蔵庫も移動して倒れています。中の食品もぐちゃぐちゃ出ていますし、食器棚も、上下分かれるようなものですが、上の段は倒れ、食器が散乱している状態です。家の中は靴を履いて歩かないと危ないような状態でした。

明るくなつて、ようやく外を見て地震が起きたんだということが理解できました。外に出てあちこちの家や周りが崩れているので、実家はどうなっているかなということ、夫と実家に向かうことにしました。いつもだったら狭い道を直線距離で、できるだけ短いコースで歩いたら一

○分ぐらいだったんですけれども、狭い道は危ないだろうということで少し遠回りをして広い道を歩いて向かいました。ちょうどこの写真の白く線の行ったところ、少し広めの道ですけれども、ここを歩いて、広い道から狭い道に入ると、ここですが、この矢印の左下ぐらいいのところが実家だったんですね。少し狭い道ですけれども、この狭い道に入ると両脇の建物が道を覆っているような状態で、その状態を見て胸が波打ったのを覚えていきます。本当にドキドキしてきたのを覚えていきます。実家に着くと二階建てなのに一階の部分がありませんでした。これが実家ですが、この写真は一月末ぐらいに撮ったものです。家の前に着くと、両親は家が潰れる前に外に出ているんだ、どこかにいるんじゃないかというふうに思っただけを見ましたし、もし外に出ているんだったら私たちのところに来てくれるんじゃないかと思っていました。でも、周辺を探してもいないし、ひよつとして外にいないんだったらこの家の中のかなと思って、二階の窓から夫と二人で家に入りました。ちょうどこの白く囲ったところ、これが二階です。二階から中に入って、「お父さん、お母さん」と何度も叫びました。何度も叫んでいると、「助けて、ここよ」と言う声の下から聞こえてきたんですね。「ああ生きている、助けないと」と必死でしたけれど、声は下から聞こえてくるのは分かるものの、それ以上はどこから聞こえてくるかが分かりませんでした。どの辺りから聞こえるのか、どこにいるんだらうかというのが本当に分かりませんでした。この四角く囲った部屋は六畳で、さらに奥にもう一部屋あったんですね。どこをどうしたらいいのか、全く見当がつかなかったです。夫と二人ではどうしたらいいか分からずに、誰か助けを求

めに行かないとということ、ちょうど家の近くにいた男性の方が助けに入ってくれました。後ほど知ったのですけれども実家から五十メートルぐらいほど離れたところに住んでいる方でした。多分家から持ってきてくださったと思うんですが、家庭用のこぎりとバールみたいな工具で、とにかく声がかかるかなと思うところの、和室の畳をはぎました。本当に小さいバールで畳をはいで、そうしたらフローリングの板間みたいなのが出てくるんです。そこから床をはぎ取っていききました。私には妹もいたんですけども、妹も結婚して家を出ていましたので、両親は二人で住んでいました。二階が空いていたんですけども、両親はそれまでどおり一階の昔ながらの洋服ダンス、和だんすが両端にあつて、その間に布団を敷いて寝ていました。何とかここじゃないかというところの床をはいで、そうするとたんすが見えたんです。たんすが折り重なつて、一階の屋根が落ちていような状態だったと思うんですけども、たんすの枠組みを壊さないように、もし枠組みの変なところを切つてしまつたら自分たちが乗っている床が落ちるわけですよ。そうしたら父母を潰してしまうので、慎重に、壊れないように、何とかたんすの引き出しを一段取つては衣類を出してという状態で助けようと思いました。そのときに私は家の外に出て、二人、三人ではどうしようもないので誰か助けにと思つて、広い道まで助けを求めに行つていました。消防車とか救急車が何台かスピードを出して通り過ぎたのを覚えていました。あちこちで火災も起こっていましたので、公的な助けを求めることはできませんでした。自分たちや近くの人で助け合うしかありませんでした。家の中にいた夫は、下から母が、お父さ

んはもう駄目と言っていたのを聞いていたようです。そのことを私に知らせないために、私に外に出るように言ったらしいです。ですから、ここから母を救出するまでの様子は夫から後ほど聞いたことです。二段か三段ほどたんすを削ったところで父の背中が見えてきました。そこには、たんすとたんすの間に少し隙間があったんでしよう。父は母をかばうように、ひじとひざを曲げて母を十字に覆うような感じで固くなっていました。揺れが始まって天井が落ちてくるまでに少したけ時間があったのかもしれない。夫がその小さな隙間に入って下から父を上げて、その男性の方が上から引き上げるような感じで父をまず出しました。父は即死だったのか、もう死後硬直が始まって、全身がひらがなのくの字のようになって固くなっていました。その後、その下にいた母を救出して、担架なんてないので玄関のドアですね。戸板に寝かせて近くの公園の地域の集会所みたいなところに連れていきました。担架、その戸板を持ちながら、その途中の母は唇の色が本当に見たこともないような紫色でしたけれど、ほとんど外傷はありませんでした。戸板で運んでいるほんと一〇分ぐらいの時間にこんなことを考えていました。これからは母と一緒に住もうと。母の面倒は私たちが見るんやみたいなことを考えていたことがなぜか鮮明に頭に残っています。戸板に乗せた母を連れていったのは、先ほどの写真の、この左上の白く囲ったところにある建物でした。地域の集会所です。建物の一階に母を寝かせました。そこはけがをした人とか、周りがこのようにすぐ潰れていきますので避難をしてきた人でいっぱいでした。時間が経つと母の唇の色も普通の色に戻って、少し会話ができるようになりました。母は、

足がおかしい、おかしい、おかしいとずっと訴えていました。病院に連れて行ってくれと、それぐらい会話ができるようになっていたんです。でも私と夫は、その集会所には、近くの外科の先生や、その集会所の横には脳神経外科の病院の先生も来てくれているので、絶対に安心だと移動しなかつたんです。情報も混乱していましたし、六甲アイランドという神戸の沖に人工島があるんですが、そこに大きな六甲アイランド病院があるんです。そこに行くにも六甲大橋も落ちたとか、二号線沿いの大きな病院も倒壊したとか、そんな情報もあつたんですね。もう本当に混乱していました。私は、母のそばにいて、たまに水を飲ませたり、痛いと言っていましたので足をさすったりするだけで、どうすることもできず時間が経ちました。何時頃だったか、近くの商店街から火が出ました。ちょうどこの写真の火はだいたい勢いが収まっているかもしれませんが、最初の頃すごく炎が立っていました。その集会所まで移ってくるんじゃないか、燃えてくるんじゃないかという心配もしたぐらいでした。でも、どうすることもできないし、近くに実家があつて、実家に父を残している、そこまで燃え移ったら父の遺体を持つて、どうすることもできないというところが気がかりでした。その後どれぐらい経ったのか、灘区に住んでいた夫の父と夫の弟が駆けつけてくれました。その集会所に来て母と会ってくれたんですね。母も本当に安心したんでしょうか、ほっとした表情でした。夫と義理の父と夫の弟、この男性三人で父の遺体をこの集会所に移動させるために集会所から離れていった十五分ぐらいの間だったでしょうか。母は急変しました。突然苦しみ出したんです。見たこともないような形相でした。死ぬ前の苦しみだったの

でしょう。三時五十二分、母は亡くなりました。あのときの苦しそうな顔は、本当にしばらく私の頭から離れませんでした。後からのテレビなんかの情報で考えると、母の死はクラッシュ症候群だったのではないかと思っています。ご存じかもしれませんが、これは長時間体の一部が圧迫されるとその部分が壊死して腐って、その圧迫が取れたときに壊死した部分から血液を通して毒素が全身に流れて、一定の濃度になると亡くなるというようなものですね。処置としては人工透析、血液を一旦浄化することが必要らしいです。母は腰から下が長時間圧迫されました、集会所にいるときも足がおかしい、おかしいと言っていたので、本当に私の推測ですけれども、クラッシュ症候群じゃないかなと推測しています。しかし、数日後の検視で検視官の方が結果を出すんですが、圧死でした。父も圧死でしたし、この遺体安置所にいらっしやったご遺体、全て圧死という結果になっていました。阪神・淡路大震災の後、クラッシュ症候群のことが一般にも知れるようになったのですが、そのときは誰も知らなかったし、避難していた集会所の近くの外科の先生とか脳外科の先生も教えてくださいだったので、避難所にいるほうが絶対に安心だと思って、その集会所から動くという選択は考えられなかったんですけれども、震災後何年かは、「もしあのとき無理してでも被害の少なかった阪神地区の病院に連れていったら助かっていたんちゃうかな」とか、「今頃は元気になって一緒に住んでいたんちゃうかな」と考えることがよくありました。一月十七日の夜からは灘区にある夫の実家で避難生活をしました。先ほどお話もしましたが、夫の実家はほぼ被害がありませんでした。しばらく水やガスは復旧しませんが、電気は震

災の日の夜には復旧していました。私たち夫婦は四月まで夫の実家に身を寄せることになりました。激震地と言われた私たちの住んでいた地域は三月末までガスが復旧せず、自宅に戻ることができませんでした。

これが、私が経験した一九九五年一月十七日です。震災当時、私は中学三年生の担任をしていました。勤務していた学校は神戸市北区にあったので、全く被害がありませんでした。同じ神戸だと思えないぐらいです。震災後初めて学校へ行ったときには、クラスの子たちに両親のことを話さないといけないと思って、とにかく必死に話したのを覚えています。それから後は震災の体験を学校で話すことはほとんどありませんでした。子どもたちにちゃんと話せるようになったのは一〇年ぐらい経ってからです。一〇年ぐらい経って「風化させたらあかん、伝えていかな」と思うようになり、授業やホームルーム、時には学年集会で話すようになりました。神戸では小学校のときから防災学習で阪神・淡路大震災のことを勉強します。中学校でも取り組んでいる学校がほとんどだと思います。防災学習は、全国の学校も、教育課程にありますのでこの地域でも取り組んでいるんですけれども、神戸の学校は、実際の阪神・淡路大震災のことを教材として、力を入れて取り組んでいます。「大切な人の命を守りたい」と、これは誰もが思うことです。大切な人、家族を守るにはまず自分の命を守ることだと思います。そのために私たちにできることは、震災の経験から学んで、近い将来に起こるであろうと言われている巨大地震に今まで以上に関心を持ち、備えていくことだと思います。地震に強い建物にするとか、家具が転倒しないよう

にするとか、逃げ道をふさがない家具の配置とか、逃げ道になったり人を助けに行ったりするために廊下に荷物をいっぱい置かないとか、すぐにできることはたくさんあります。ご近所にどんな人が住んでいるかを知るのも自分たちの命を守ることにつながると思います。こんな話を家庭科の授業でも何度もしてきました。また、六四三四人余りの人が亡くなられたこと、それぞれの人がその人のことを大切に思う人が何人もいて、どれだけの人が悲しんだり苦しんだりしたかを想像し、代わりのない自分の命や友達の名についても伝えてきました。

ここで、神戸の工業高校で教員をしている友達からこの夏休みに聞いた話をさせていただきます。その友人は今年度、都市工学科の一年生の担任をしています。入学式を終えて作文に目を通していたところ、次のような内容があったそうですので紹介します。「私は災害に強いまちづくりに興味を持っています。最初に関心を持ったのは、阪神・淡路大震災です。私が生まれる前に起きた災害ですが、小学校の授業で多くの建物が焼けたり倒壊したりしている衝撃的な映像を見ました。そのとき、どうすればこれからもずっとみんなが笑顔で安心して暮らせるのだろうかと考えようになりました」という内容だったそうです。そして、この生徒は都市工学科に入学してきたのです。また、この高校の学校説明会、中学生が保護者と一緒に、行きたいと思う高校に行つて説明を聞くというのですが、その場で保護者の方からこんな質問を受けてきました。

この学校は防災士の資格も取れるのですが、その場で保護者の質問は、「防災士の資格は何の役に立ちますか」というものでした。その質問に答えている三年生がいたそうです。考えた彼は「自分の命を



守ることにつながります。それは家族を守ることにつながり、地域を守ることにつながります」と答えたそうです。私が直接彼を教えたわけではないですが、神戸の子どもたちが小学校や中学校で震災の勉強をしたことや、保護者の方や地域の方から事あるごとに震災に触れていたこと、このように考える高校生がいるのだと思い、私も胸が熱くなりました。神戸には「しあわせ運べるように」という歌があります。小学校で習って、小学生は必ず歌っています。中学生になっても当たり前のように歌える歌です。今年二十六歳になる娘も歌えていました。下の子、二十一歳の子も歌っています。ちよつとここで歌を流したいんですけれども、友人のお子さんが小学校のときに神戸の大きいホール、文化ホールで発表したときの音源になります。一番だけ流したいと思います。

（音楽「しあわせ運べるように」）

一番だけになりました。この歌を聞くと私も神戸の当時の街の様子を頭に思い浮かべることができ、そのときに中学生の子どもたちと一緒にこの歌を歌ったときの気持ちとか、そういったものも思い出すものです。日本はどの地域に住んでいても、地震という災害から切り離して生活することはできません。今回の私たちの話をきっかけに、地震に対する備えにより一層関心を持っていただけたら幸いです。私は二年前に、五十四歳で亡くなった母の年齢を超えました。これからの私の時間は、父や母が生きられなかった時間です。夢を持っていたのに突然死ななければならなかった人。生きたくても生きられなかった人。六四三四人もいたのですから、その人

たちに恥ずかしくないように今を生きていきたいと思えます。生きていたらどんなことにも挑戦できるし、やり直しはできるものですから。震災後数年経って、夫とこんな会話をしたのを覚えてきます。「私らが生き残ったのは、生き残ったのも奇跡なんだから何でも死ぬ気でやったら何とかなるわ」と会話をしたんですが、これは今でもこのように思っています。来年、娘が震災当時の私の年齢になります。父や母が私にしようと考えていたことを、私が娘のためにやっていけたらなと思っています。私に与えられた時間を大切に、まだまだいろいろなことに挑戦していきたいと思っています。

そしていつか向こうの世界で会えたときに「頑張ったね」とか、「頑張ったやん」と言ってもらえるように。長くなりましたが、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

○司会 和氣光代さん、ありがとうございます。和氣さんは、初めてのご講演ということで、今後のために感想があればお聞きしたいのですけども、どなたか、感想を言いたいという方はおられますか。ぜひお願いします、いかがでしょうか。

○質問者B 一人一人の意識とか学びとかが今後に続くんだな、つながっていくんだなということとすごく感じさせられるご講演だったなと思います。神戸の子どもたちは震災を題材にとのことだったんですけども、ちょっと離れた枚方とかの大阪方面は、そこまで神戸のことを題材にはなっていないと思うんです。しかし、今後も防災訓練などで学んでいくと思うので、こういう

つながり、関わりを大事にしていくんだということを伝えていけたらなと思いました。ありがとうございます。

○司会 それでは皆さん、和氣光代さんにいま一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

○和氣 光代 ありがとうございます。

○司会 続きまして、最後にお話しいただく田村勝太郎さんです。田村勝太郎さんをご紹介いたします。田村勝太郎さんは語り部KOBEBE1995の前代表でいらつしゃり、体験を語り継ぎ、本気の防災を求めて今日まで活動を続けてこられました。

それでは、田村勝太郎さんにご講演いただきたいと思えます。皆さん、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

○田村 勝太郎 今ちょっと混乱するぐらい興奮や緊張をしております。前に話をした二人の話を私は初めて聞くわけです、あと六人ほどメンバーがいるわけですけど、そのメンバーは枚方の、ひらパーの向こうの学校に行つて一緒に話をしてきたこともあったり、どこでどんな話をしたのかたくさん知っていたんですけれど、お二人のお話は初めて聞きました、いろいろと自分の体験を重ねたりしてしゃべろうとしていることがまともにいくかなという心配をしております。

震災当時、私は五十三歳で、八十歳の母親と一緒に芦屋市に住んでいました。芦屋市と言っても川を隔てて三分ほど西へ行けば神戸というところに住んでいたので、そこで当時、神戸の小学校の先生をしていて、一年生の担任でした。退職後は五年間、神戸市で囑託として働い

て、その後は後輩たちが特別支援の学校、私たちは障害児学級と言いますが、その障害児学級の人数がたくさんいて手が回らないから助けてくれということで、十五年か十六年目になるのかな、後輩のお手伝いをして、今の学校では九年、次から次といういろいろな子どもたちと楽しく過ごしております。

震災の話ですけれども、本当に初めは怖かったです。私は二階で寝ていて、母親が下の階で寝ていて、急に縦に揺れ始めて。木造ですからこういう、ほぞで組んでありますよね。それが抜けていくんですよ。見ていたら、まるで安物の表紙に型を入れているみたいに抜けたら元に戻らずに違うところにバーンと当たって、俺の人生、終わったと思いましたね。もう家は完全に潰れるだろうなと思いました。そうすると二階の階段がねじれて、安い家でもあそこは太い木でできているものなんですけれど、それがすぐくねじれてバリバリと裂けていきました。今でもその音を思い出さないことはありません。下の階に母親がいるので「大丈夫か」と聞いたたら、「大丈夫」と返事がありました。それを聞いて私は、「こたつに潜れ」と言っただけです。というのも八十歳の母親ですから、布団の上げ下ろしが大変だということと、向こうにテレビがあつて、その布団から二メートルぐらい離れたところにホームこたつがあつて、向こうにテレビがあつて、そういう感じの部屋でした。私が「こたつに潜れ」と言ったら、「分かった」と返事がありました。そうすると家がぐちゃぐちゃになる感じで、ドーンという大きな音が出て、あとは暗闇の中でかびくさい匂いが漂っていて、はっと我に返って親がいるんやと思つて、「大丈夫か」というと、

「大丈夫」と返事がありました。家が潰れていたんですけど、どんな状態だったのか、写真を一枚映してください。外に出ようと思って、もう階段も駄目だから二階の窓から出ようと思って、立ったらスケートをするみたいにスーッと滑っていくわけです。足をけがしたら困るから何か欲しいなと思って探してみたら毛布があつて、その毛布をパッと握って、これぐらいの二階の窓でしたが、そのすぐ下が道路になっていて、そこに毛布を置いて、足をけがしないようそれを踏んで外に出ました。そうして、外からまた母親に「大丈夫か」と言うと、「大丈夫」と返ってきたので、生きとるなと思いました。この写真も我が家ですけど、この窓の奥ぐらいに私が寝ていて、母親はその潰れたところの下ぐらいにいました。向こうの窓から毛布を置きながら外に出ました。

同じような家が二軒並んでいて、もう一つはお母さんと、それから二十歳と十八歳の男子二人がいる家でした。お父さんは朝四時ぐらいから工事現場に行っていました。その男の子が外に出てきていたので「お兄ちゃん。お母さんをお呼び」と言ったら、その男の子は「おかん、大丈夫か」と呼びかけました。中から「大丈夫」と返事がありました。お互いに二人の母親は生きていたわけです。しかし、どうすることもできずに二時間近くここでうろうろとしました。そのときに私が男の子に、「すまんけど消防署まで行ってくれ」と言いました。普段なら消防署まで歩いて七、八分かかるんです。それを素足で走って行って、帰ってきて言った言葉が、「おっちゃん、あかん。消防署の人が自分らで何とかしてくれと言っている」でした。言った消防士さんも非常に残念な思いをしていただろうと思うし、聞いた私も、こころしか見てないんだけど、

周りにどれだけ大きな災害が起きているのかわかりました。日本だったら消防、救急車とか、パトカーとかを呼べば遅くなくても来ますよね。それがもう消防署は行けない。しょうがないからうろろとしていました。ガスのにおいがバツツとしてきて、明るくなってきたときに近所のお兄さんが二人来て、「どうした」と言うから、「母親がおつてどうしようもない」と言いました。お家からボールとかのこぎりとか、いろいろな道具を持ってきてくれて、ロープを背負つて向こうの隅っこのほうから二人と僕と三人で入つていって、そうするとホームこたつがあつて、上には大きな物がいっぱい落ちてゐるわけです。布団をめくつて「出てこい」と言つて、母を引つ張り出しました。背負つた背中では母親が「あんたが早く助けないからおしっこをちびつたやないか」とわめいていました。この寒い中じつとしていたわけですけれど、本当にかすり傷一つしてなかつたです。

向こうに行つたら潰れてゐない家もあつて、外にいた近くのおばあさんが「寒いから家に入りなさい」と言つてくれました。しかし、私はじつとしていられなかつたので外に出ました。すると向こうで「親父」と騒いでゐる僕と同じ歳ぐらいの男性がいて、行くと男性が親父さんのところに五十センチぐらいまっすぐに下に入つていこうとするから、男性の妻と娘と思われる人が、「あんた、やめて」と男性の足を引つ張つていました。私はそこに行つたけど本當に何もするところができなかつたので、また戻つていたら、向こうから知つてゐる高校生の女の子が、「おばあちゃんがいない」と言つていました。その女の子はおばあちゃんと二人で、立派なお家に住んで

いました。「どこで寝てたん」と聞いたら「あそこ」と言われましたが、家は潰れていません。ブロックの塀を登って上がっていくと、わらを土に練り込んだ壁の、昔ながらの立派な家です。竹でコンコンとつついて穴をあけたらおばあちゃんがいて、頭を引っ張ってね、まだあったかかったんですけど、もうグラグラでパーンと叩いても返答はありませんでした。下にいる女の子に「駄目だ」と言ったら、寒い中、道路に伏せて泣いていました。どうしようかなと思ったらお巡りさんがたまたま自転車を通りかかって、訳を話すと「後は私がやっておきます」と言ってもらったのでその場を離れました。

母親を連れて市役所の向かいにある近くの精道小学校へ行きました。そのときにその近所の人がお母さんということで布団一式を上下セットでくれました。それを担いで、母親まで引っ張っていきましたが、四階建ての小学校は三階まで人でいっぱいでした。教室は全部、机を廊下に積み重ねて、子どもたちの教室のフロアのところ已全部で二十人ぐらいですかね、昔風に言ったら起きて半畳寝て一畳という、それだけのスペースをお互いに確保しながら生活しているなという感じでした。四階はちょっと空いていて、段ボールを拾ってきてその上に布団を敷いて母親を寝かせました。母親がしょぼんとしてつらそうで私もしようがないので、ここでうつらうつらとしていたら、どこからかご飯が炊ける匂いがしてきて、朝からほとんど何も食べていないこともあって、腹が減るとこんな夢を見るのかなと思っていたら、ポンポンと肩をたたかれて、はっと気がつくと中学生の女の子がこんな紙皿におにぎりを四個載せて、

「どうぞ」と声をかけてくれました。えっと思って、おにぎりをいただいてパツと見たら、入り口のところにお母さんと高校生ぐらいの男の子が炊いたご飯を、部屋に十二、三人いたでしようか、みんなに振る舞おうと思つて、一生懸命におにぎりをつくつてくれていました。避難所というのは、私のようにもう行くところのない人や「家が潰れかけて怖いな」とか「電気もつかないし、水道・ガスがあかん」という思いがある人が避難してくるので、開設して五日間ぐらいは避難している人は非常に流動的です。お孫さんとおじいちゃんがいて、一緒に話をしていたらお母さんがやつてきて、大阪でホテルが取れたから行こうと言つて出ていった人や、会社の人がやつてきて、「おまえ、神戸の店は潰れとるからあかん。大阪に行ったら社宅もあるし、職場が変わるけどええか」と言つて連れていかれた若いご夫婦がいました。そういうふうにいろいろと動いていくわけです。

ある晩の十二時近くに起きていたら、幽霊みたいなご夫婦がやつてきて、「空いていますか」と言うから、「どうぞ」と言いました。ご夫婦はそこに座つて、お父さんの方が僕をパツと指さして、「おい、聞いてくれ」と言いました。私は、何が起こったかすぐ分かつたので、あぐらをやめて、正座をしました。お母さんの方は、うつむいて毛布を被つていて顔も見えませんでした。お父さんは僕を見て、指さして、「わしの息子と娘が何を悪いことをしたんや」と言いました。十八歳と二十歳の息子さんと娘さんを一度に亡くされた方で、私に向かつてアラムをめくるように、小さいときはこんなふうで、楽しく家族でこんなことをして、娘が生



まれて、小学校時代にどこどこへ行つてとか、思い出をずっと語っていくわけです。最後はやっぱり二十歳、十八歳の息子さんと娘さんだから、社会へ出て、こんなことがしたいという夢があるわけで、「こんなことをやろうという夢や希望を持って楽しんでたんや、わしの息子と娘が何を悪いことをしたんや」という話になりました。そうして話が終わったと思うとまた初めに戻って、私の記憶では三度聞きました。ひよっとしたら五回ぐらいかもしれません。周りの方から、ペットボトルに入っているお水なんかをどうぞと言われても、一切手をつけずに話続けられました。話が終わった後にうつらうつらとしていたら、二時ぐらいにはその方たちはいなかったです。やっぱり亡くなったといえども自分の子ども二人がどこかに安置されているわけでしょうから、そこにおいてあげたいという親心があつたのか、いつの間にかいなくなっていました。不思議なことにその二人は、私が仮設住宅に入ったら半年遅れで近くに来られて、それから復興住宅に入ったらすぐ隣に住まれて、一〇年ほどお付き合いしました。一〇年ぐらい経つたときには、お父さんはかなりしつかり頑張つて、いろいろなことをやっておられました。やっぱり先ほどの僕らの仲間の二人の話もそうですが、さっきのおじさんのような話を聞いたときにいつも思うのは、助けることのできなかつた命のことで、神様というのは、「死ぬことと生きて残れということをあんたはどこで一体線を引くんや」というふうに思います。私は二十九年経つた今でも、そのときの話をするのは本当に苦しいです。胸のあたりが痛くて耐え難い気持ちになるんですが、それでもその過去を何々だったという一言で僕は済ますことができるわけです。それが

苦しいです。頼りたい、けれども大切な人を亡くした人はその人の死というものを一生背負っていかねばなりません。中学生なんかに話すときは、「絶対に自分でな、自殺なんかするなよ」と話します。「自分が死んだらどれだけ周りにいる自分を愛して一緒に生きてきた人たちが悲しむか、一生背負っていくんやで」ということをまた今年も、今行っている小学校の六年生へ向けてする震災の話を、最後に言います。

二日目の日に弟が広島から車でやってきてくれたので、母親のことを頼みました。それから僕は自分の小学校に行くことにしました。というのも、北淡町というところに震源地があったんですが、僕は神戸市の一番端に近い芦屋に住んでいて、自分の行っている荒田小学校はちょうどその真ん中辺りにありました。当時一年生を持っていたんですが、自分の住んでいたところよりも震源地に近いので、何人かは死んでいるだろうなというふうに思っていました。小学校に向かっている間はずっと生きた心地がせず、常にそのことを頭の中で考えていました。Aという弟の友達に「すまん、お金を貸して」と頼み、小銭で二千円ぐらいを借りて、それをポケットに入れて、パジャマのまま出てきたわけなので、いつの間にかジャージ、靴までもらって、Aくんに借りたボロボロの自転車に乗って、朝ごはんは小さいウーロン茶と、食パンのひとつかけらの二つを持って、五時間ぐらいかけて、自分の勤務している小学校に行きました。行くなり僕が教頭に「子どもたちは」と言ったら、「大丈夫、全員生きとるで、保護者の方も大丈夫や」と

返事がありました。そのときは、本当にホッとしました。それまでこの辺にもう体の動きがとれないぐらい、「死んでいる人と違うか」というすごい重圧があったんだけど、亡くなった方には本当に悪いですけども、そのときは本当に万歳と飛び上がりたぐらい、みんな生きているということが嬉しかったです。教員仲間が、「田村、ここはもう学校ちゃうで、教室から見て回って」と言うから、ちょうど三時過ぎだったんですが、まず初めに、自分の教室に行きました。私は生き物が好きで、当時一年生の教室では小鳥をニカゴで八羽、飼っていました。あいつら、死んでいるやろうなと思っただけなら、飼っていた小鳥はピーピーと鳴いていて、きれいにした新聞紙が敷かれているし、えさも入っていました。自分の担任している、Kちゃんという女の子がパーと走ってきて、「先生、えさをやっていきますからね」と言いました。その子もお家が潰れかけて、お姉ちゃんとお父さんとお母さんと避難していたんですが、やっぱり自分が避難していてもクラスにある小鳥を大事にしてちゃんとえさやりをしていくことがものすごくうれしかったですね。本当はもっともっと褒めなければいけないところを、「そうか、ありがとう」ぐらいで、ついでにざっと言っただけでした。二年生、三年生、四年生の教室、全部同じで、先ほどの精道小学校と同じように、子どもたちの机が廊下に並んでいて、人が入っています。もちろん体育館もいっぱいです。

次は体育館のところの写真を映してください。これは私が行っていた小学校の隣の小学校ですけれども、どこの小学校もほぼこんな感じで、もう人がドットと入って通路がぐちゃぐちゃに

なっていて、ステージの上も何か荷物が置いてあつてという感じでした。こんなふうに一遍に入っちゃって整然となんて到底できないですね。こういうのを見て回ったんですが、当時の高齢者の人たちは、床で座るのがしんどいからと、廊下に座っている人たちがいて、みんなうつむいていて、「ああ、俺の人生はもう駄目や」という感じでした。私も当時五十三歳だったからか頑張って行こうかと思いましたが、そのときに七十歳だったら、例えば家を建て替えるのにローンなんて組めませんよね。何にもできない、明日が見えないというように感じたと思います。学校中をずっと回った後、荒田小学校では夜八時からミーティングを毎日していたので、その日の晩に初めてミーティングに参加しました。避難所にいる先生は、私が五人目で、子どもの数が二百、避難者が八百人で子どもの数の四倍いるのに、これまでは先生は四人でした。やっぱり避難所が動いていくのは非常に難しく、私が行っていた学校は校区の一番南西にあつて、道を隔てた反対は違う学校だったんです。ですから、避難所に行ったときに入ったメンバーがお互いの顔を知らないということが多かったです。遭難してきた人が卒業生ばかりだったら、おじいちゃん、おばあちゃんも卒業生でお父さん、お母さんも卒業生となれば、「おまえ、何とかやれや」とかいうことで運営母体の形が作れて動くんですけども、お互い知らない人ばかりですから黙って座っていて、その分、たった四人の先生で二日間頑張って、僕を入れて三日目で五人。一〇日ぐらいはそれで大変だったんです。

一〇日目ぐらいから運営の母体ができて動き始めて、それからその避難所では素晴らしいこと

をたくさんやっていきます。ミーティングの終わりに「田村、何か気づいたことはないか」と言うから、実は三つあるんですけれど、今日は時間の関係で一つだけお話しします。そのとき僕は「明日から運動場で喫茶店をやらせて」と言いました。なぜ運動場で喫茶店をやったのかということ、私はやっぱり亡くなった方をたくさん見てきたので、せっかくここまで逃げてきたお年寄りに、病気をしたり何かで早く死なれたりするのは嫌だと、天寿を全うしてほしいなという思いがあったからです。これから寒くなつていきますけど、子どもたちに「いじめていたら外に出てお日様に当たれ、あつたまるために風に当たれ」とか、そういうことを言います。大人も一緒に、部屋でじっとしても何にもならないので、外へ連れ出そうという狙いでした。たまたま僕は理科担当だったから、理科室に行くと、八百人で分けられないものがいっぱい並んでいました。インスタントコーヒーの瓶が三つ、紅茶やグリーンティーのティーバッグ、塩、砂糖、ソースなどがいっぱい並んでいるんです。おかきがあったり飴があったりもしました。これは使えると思えました。オーケーをもらった次の日に喫茶店を始めました。次の写真をお願いします（子どもたちの写真）。そうすると私が四年生で教えていた当時の五年生たちが、わつと寄ってきて、「せろ」と言ってくれるんですけど、やけどが怖かったので「あかん」と言うと、「私らは五年生でちゃんと味噌汁を作ったから大丈夫や」と言われて、変な理屈について負けてしまつて、「やけどをしないように頑張ろうな」と言い聞かせて喫茶店を始めました。それから約四週間、学校の再開はありましたが、これは二時からやっていますので、続けていました。校内放送で

「青空喫茶をします、出てきてください」と言ったら、いつも五十人近く出てきていました。この子たちに空いている机を持ってきてもらって、子どもの机を四つとか五つとか組んで運動場にテーブルを作りました。次の写真をお願いします（喫茶店の様子）。ウエーターとかウエイトレスとかもいまして、こっち側の子たちに「さあ行ってきて」言うのと、テーブルに行つて注文を取りに行つてくれました。おじいちゃんに、「何にする」と聞くと、メニューがありませんから会話が生まれます。「何ができるんや」と聞かれて、子どもが「コーヒーもできるし、普通のお茶とか紅茶とかカルピスもあるで」といった会話がありました。注文を聞いて帰ってきたこの子たちは、ちゃんとこちらにいる子たちからコーヒーやお茶をもらつてテーブルまで行きます。やっぱりこの子たちは素敵でした。この子たちは外から来たのではなくて、この子たちも学校の中に親と一緒に避難しているわけです。二日目の日に、時間もあつたので、「ちよつと食べたり飲んだりしに行こうかと」、おじいちゃんやおばあちゃんのところに行きました。そうすると、全員の方が涙目で言われたことは「先生、子どもの顔っていいですね」という言葉でした。スターがいるわけじゃないですけど、子どもの顔を見たら「ここはやっぱりわしらの町や」ということで安心できるのだと思います。それからある方は、メニューのやり取りとかいろいろな声を聞いたら、それだけで「へこたれんと頑張れ」というメッセージみたいに関心されると言われていました。後押しをしてくれると。言葉では私はそういうのは言ったり言わなかったりしますが、実際にそういう方からそういう場面で今までの

ことを聞いたのは初めてで、感動しました。子ども達にはいつも、今でも「あんたら、いるだけですごい力になっているねんで」と伝えることがあります。

もう時間がなくなってきたのであと少しだけお話をさせていただきます。避難者がお互いに今日のテーマにあるように、助け合い、支え合いをしたということをお話をあとお話させていただきます。マッサージをする全員のOさんという方がいました。僕は娘さんを知っていて、その子は中学校に行っていたんですけども、妻と二人で体育館の真ん中に避難をされていて、私に「田村先生、わし、ボランテニアがしたい」と言われるのです。私が、「何をしてくれるのか」と聞いたたら、ボンと肩をたたかれて、「先生、わしができることはマッサージしかないで」と言われました。よく話を聞くと、月水金の一〇時から十二時まで、最低でも三十分するということ、 「部屋を取っというてな」と頼まれたので、部屋を用意しました。放送したら人が来るわ、来るわで、慌ててノートを買ってきて、ノートに予約を書き込むようにしました。その方もやっぱり四週間近くその活動を続けられました。家は何とか元に戻ったので帰っていかれましたけれども、やっぱり素敵な方でした。昔、奈良へボランテニアのコーディネーターの帰りに話をしに行つて、そこでこの話をしたときに、二百人ほどいた人たちからざわめきが起きました。ボランテニアというのは強い人から弱い人、物を持っている人から持っていない人といった上から下へのラインで自分たちは考えるんだけども、今の話を聞いたら、結局、今持っている力を出し合うのがボランテニアの基本なんだというようなことをしゃべったことを覚えて

います。

避難所には、お弁当が配給されるんですが、今と違ってたくさんのメニューはありません。腐ったら困るので岡山辺りや、この辺りのもう少し東辺りからお弁当がやってきます。やってきたお弁当は、漬物があるぐらいで、魚だったら塩辛く、鶏のフライだったら冷たくなっていました。ある時、仲良くなったおばちゃんたちから「おじいちゃんやおばあちゃんたちが、お弁当な腹が減っているけど半分しか食べへんねん」と言われました。私が「何で」と聞いたら「あんな、先生、冷たいやつなんか年寄りが食えるか」ということでした。ご飯も取って叩いたらこぶがでさるぐらいカチカチになっていて、私もご飯だけは食べるときに水道のところまで水にひたして戻して、柔らかくしてから食べていたんですが、おばあちゃんたちに「どうする」と言ったら、何か汁物を作りたいと提案をされました。給食室に、大きな鍋はあるなど確認しました。ちょうど前日に曹洞宗のお坊さんたちが、大きなドラム缶を半分に分けて火口を作って、上にすのこを乗せて、炊き出しをやってくれたので、その方たちが帰るときに「頼む、二つ置いていって」と頼んだら「大丈夫です」と置いていってくれました。そこへ鍋を置いて、汁物を作りたかったのですが、肝心の中身がありませんでした。その日の晩は歴代のPTA会長さんが四人そろって八時に来てくれました。四人のうち三人はお店をやっていて、八百屋さん、魚屋さん、その中にお豆腐屋さんがおられました。「頼むから豆腐くれへん」と言ったら、「わしのとこ、店は潰れと」と返されたのですが、次の日、一〇時ぐらいに向こうから「田村先生、豆腐を置いておく



ね」と言われて、運動場の手洗い場に行ったら八つぐらいバケツに豆腐が浮いていました。おばちゃんたちのところへ走って行って、「来たで、豆腐が」と言いました。その晩、おばちゃんたちは頑張ってくれて、温かいものを初めて配りました。すごく好評でした。鍋を洗ったりしながら僕もはたにいて、「明日はないな」と、いじましいことを言っていました。そしたら、次の日、同じように野菜が、白菜とか大根とかが届いていたんです。教頭先生に「先生、買ってくれたん」と聞いたたら、「わしは金がない」と言われて、誰が持ってきてくれたかわからないけど「使おう、怒られたら田村が勝手にしたと言ったらいわ」と言って使わせてもらいました。二日目も終わって、三日目はもうないなと思いつつ、念のためまた行ってみると、ハムなどの加工肉や塩干物、乾物がありました。それで三日目もやって、終わって、まだしつこく四日目も私は探しに行きました。さすがに何もありませんでした。十二時ぐらいになって、神戸の北側の三田市から農業をやっている若い人たちが軽トラにいっぱい野菜を積んで「こちらで炊き出ししているそうだから使ってください」と来てくれました。募金も集めてくれたみたいで五万数千円も受け取りました。おばちゃんたちを呼んで、校長のところに行つて、「これを使つていいか」と言つたら、許可が出たので、おばちゃんたちに渡して、「これでしばらくどれだけ行けるかわからないけど続けてほしい」ということで、二月の終わりから三月の初めぐらいまで炊き出しが続きました。僕は、今でも夢ではないかと思うんだけど、やっぱりおばちゃんたちも、「年寄りに嫌な思いをさせるのは、私ら若い者の恥や」という、やっぱりそういう思いはすごく熱かつたんでしょね。

このことはぜひ、加えたかったなというふうに思いました。最後にもう一枚写真を写してもらえますか。もう一つお話したいことがあります。

最後に在日の方の話、Rさんというおじいちゃんのことです。このおじいちゃんは、やっぱり長いこと虐げられたこととかいろいろなことがあって、僕が行っても一切話してくれないし、何か出したら要らんとパーンと手を叩かれたりしていたんですが、周りにいるおばちゃんたち四、五人とは仲良くやっています。学校は潰れなかったけど子どもらが飼っていたウサギ小屋はこんなふうになってしまって、引越もしないとあかんとなり、違うところに仮設のウサギ小屋を作ったんです。そうするとこのおじいちゃんはウサギが好きだったのか、子どもらが世話をしているところに行かれていました。そして、子どもたちが僕のところへ走って来て、「おじいちゃんがウサギのことごっつい詳しいねん」と言うのです。「いっぱい教えてもらい」と言うと、Rさんと子どもたちは打ち解けていたようです。

次の写真に 부탁드립니다（神戸の街並みが描かれた段ボールの間仕切りと子どもの写真）。神戸市で間仕切りを保健所から獲得したのは、恐らく荒田小学校だけだと思います。九十九ミリで厚さが五センチの段ボールで重たかったです。Eちゃんという六年生の子がおばあちゃんと弟と避難をしていて、真っ白って寂しいからといって、こういうのを描き始めたんですね。絵が上手ですね。そうすると体育館に避難しているおじいちゃんやおばあちゃんたちがわしのところも書いてと言って、合計三十数枚、描き始めたというすばらしいお話があります。本当にこれはいつ見て

も、震災前の、こちらは海があつて、南京町があつてそこにそごうがあつて、上にロープウェイがあつて、昔の神戸に早く戻つてほしいなという切ないような思いを私は読み取ります。

最後に、僕は避難所の暮らしの中で、先ほど言ったように、その中でも自分たちがちよつとい暮らし、楽しい暮らし、楽しいものを求めて皆が助け合つたり支え合つたりして、子どもたちや、全盲の方もおばちゃんとか誰かれ関係なく皆さん、そういうことをやっていた。このことは絶対にたくさんの方々に機会があれば伝えたいことです。もう一つは、自分がこういうふうに話していることを、「いつまでおまえはしゃべってんねん」と昔の仲間に言われることがあります。僕は、こういうすごい人たちと出会つたことは宝物だと思うし、それはやっぱり伝えたいと思います。もう一つは、自分でも気づかない間に、ジャージをもらつたり、靴をもらつたり、いろいろなことをサポートしてもらつて、そしてそれがもとで今があるということ、やっぱり不特定多数の人だから、お礼が言えません。分かつていたら「ありがとう」と伝えられた。こういうふうに皆さんの前で、呼ばれたら行つて話をするのがいろいろ支えてくださった方々へのお礼だと思つて、私はこういうところへ出てきております。最後に一言だけ、神戸新聞さんが来られていますけど、二十年のときに神戸新聞さんがすごかつたのは、「災の国日本、覚悟を」という言葉を掲載されたことで、「災」というのは「災い」のことですが、今も僕自身、防災を考えるとこのいい言葉をいつも胸に秘めています。神戸新聞さんは、その後掲載されていないので、三十年になつたらもう一回出してほしいと思います。災害がいろいろなと

ころで起こっているわけです。みんな命を絶対に失わないということを考えると同時に、自分とか家族とか学校がとか、そのためにどんな覚悟をするのかということを語ってくれた言葉です。僕自身が大事にしているので神戸新聞さん、また掲載してほしいと思います。ちょっと長くなりましたが、ありがとうございます。（拍手）

○司会 田村勝太郎さん、ありがとうございます。ご質問がないようでしたら、少し私から感想を述べさせていただきますと思います。炊き出しやボランティアのお話が田村さんからありましたが、今までに話したこともないような人たちが避難所に集まった状況の中、やはり人と人の関わりが大事なですね。関わり方が分からないという人も、コロナ禍が明けた今おられると思うのですが、勇気を持って話すということがつながっていける、これから生きていける、そういう一つのヒントになっていくのかなと、お話を聞いていました。講師の皆さんのお話で地震が起こったらどんなことが起こるのか想像することができ、実感させていただくことができました、ありがとうございます。この災害の教訓については、心構えがあるか、ないかによって、自分がどのように行動できるかにつながる重要なことだと本日、三名の方のお話を聞いて強く感じました。このような教訓を忘れないように、今後も受け継いでいくために語り部KOB E1995の皆さんには、活動を今後も続けていただきたいと思えます。これからも活動を応援していますので、頑張ってください。

○田村 勝太郎 ありがとうございます。（拍手）

○司会 それでは、本日本当にお忙しい中、ご講演いただきました語り部KOBELI995の崔秀英さん、和氣光代さん、田村勝太郎さんにいま一度大きな拍手をお願いします。（拍手）  
ありがとうございます。それでは、これで本日の講演を終了させていただきます。

